舊蹟紀聞

甲

15

買
32
1

イ 5
32
1

曽 5 イ 32 甲 巻 1

浮世の跡をはなれて一方に心をとむる人ハさそ
大寂菴主といふ人也けるをかゝりめなりける同す
仏経耳に入てよりしもなやしも世をのかくは
ありしくかれハこなるむ是ハからん事と思ひなるか
ふしくいとおほゆれとも人の庵をのみはさみて
いまは昔たハかれあつかされさかれ世をの枝にまさるの
江戸に杖をとゝめ家よむすほおねとさて人そた

はしるまたく我の庭上のみつてみしるすれ
るはし法記の子川ある者たいやう時もしられ
めつらちる説ともなれを誰もしゆくしめて其川のく
且ていりて華にか変ひらりして学待へてよとせをはらひ
おるをはのみハかりしをりし面書にふもおしはとてこるみ
さらに本たにハ志をせられるにあむ何る人は子みなて
来ておのれならしまはは蕃主僧の道をささぬ
多あるたかしけ子みをしもして世にとらめんとするは

守多の子る面にと名のおれてとたゝるにハおろ作やと
恐れりりおのれ参くてりひけらくいそれさらおらても拙
いたしぬしハそもく蕃主ハ佛おそこふとみて
学の人をねんとする人也しハあれともそのさえの
学あるそくれるとその学のちるのかけるゆへこの
法園のゆるをさくる面やんにさとしめしあてさけ子みをハ
かのそこれし也はなは今の人くはけ子みとみる
年月おたけつのなくせれやうしるをもかうけ又ひらく

そかしのくらくおんなしるしてさわなやしけは
きよまちの堂を始よ一子しせとらひなやましきをせん
さしらひ茶をとるてはなかちよなを学まかやっさんとする
たくひとおしなみはあまつき始しめん八茶葉の名のおく
ほよくみとほりかとハ又へしんとこらくれハらしし
人とさりしゃせひるまむ　ものはなおりてやから
云そ侍

眠雲舎のあるじ　本間樗清しるし

ちや之みちの好りあれは浮菊の人ぞも
さかんなり樗庵にて茶酒をひらき さて其の
何事利くとし甚き母志へ津る庵のところ
有新して何人ともをほしき天田某
八物のせしみかね津事不苟さとなの
むかし其加一の契のくり雪はつ
其の母ともかしかき蘇ともいへるか
志つきふしくハ不そのくは新留し於ね

目六

津なぞ縁みのこハつゐ人賀あらし不自由さとの
きみるかれるハい海やまへこしらふ魚のす
こかしすまぬ世をうろ庭の大河人み
杖をとじ紀さく飛射をいるとまでのまへ入
うはゆふ乃かさね枕のたをやり文でこともの
下書ひとつとまぬ身ハ人れこみ足ら
文づさはしもつゐぬを庭の人生へ恋しき
みさしも老のきて物をうる津らで 翁帥

とゞろき落る水をもほとしつ人ハ人かあきれいづる
りおそろしく八尾ぐし仇くて来り鬼の
きぬをし都くのおさなきを大きのくハく
とハおとゞみを世の存と目ざましよる萬をも
魚兎すまく女人ばかりやうのとりすさ
あさ見のて世ハ飛とハれなくみをさかしと
もうまき侍えしそめし津名人捋ゆふ
乃海の津つとめ美世のあるも世を見で美

用事

彼これらの由緒ともこの言葉とこのぐさしいつふ
ぎ語つるのこ文化の十四年しいふ冬しめ
八月の弥ごろ大寐菴立綱

上下目次

樂浪之淡海　鳰海
磯前　八十之湊
あふみぶり
網浦
䐇井　手綱濵
行方郡
潮来村
高房神
時平大明神
菖蒲の前
比禮振山乃化石　天草人
小篠敏が八頭蛇の話
逍遥院内府公鶯のこと
稲負鳥
咲眉春ハ彦火々出見命の考
端出縄
河蝦ハ河鹿の化しけるよし
淅曽　阿太
頭
麻呂

夫妻　娶婿嫁
鳥居　古手屋
慈門禅尼
東儀氏　棉衲禅師并三女のこと
隠士茂矐　餅をぬくだとらなし
讀棟梁集　吾妻富士山　東都の稱呼淺間の名義

旧蹟紀聞上

一名宇幾久左乃安止

淡海　大寂庵立綱著

樂浪之淡海　鳰海

樂浪ハもと地名にて滋賀郡にあり書紀ニ筱浪郷萬葉に樂浪海ハ樂浪之國津御神・神樂浪之大山守などみえ千載集にハさゝなみや志賀乃都ハあれにしを昔ながらの山櫻かなとあれなどなれバ滋賀郡ハ樂浪の國にて志賀乃都のころハさゝなみの海といひしなるべしそれよりやゝくあふみの海の冠辭となりたるなるべし後もさ鳰の海と稱せるハ記に於是其忍熊王與伊佐比宿禰共被追迫乘船浮海歌曰伊奢阿藝布流玖麻賀伊多弖淤波受波迩本杼理乃阿布美能宇美迩迦豆岐勢那和

即入海共死也とあるよりいひ初しにやといふ説には将然らく
住海なればしかいへるなりといふもあれどいづこに野洲郡に仁保と云
郷あり今も此名あり和名抄には邇保とかきたれば此仔細にて
其邇保乃海といひたるがいつしか湖の總名のごとくなりたるを
いへるなるべき今の人は保の字を濁音によめるなり

磯前　八十之湊

萬葉集三高市連黒人羈旅歌八首乃中磯前榜手回行者
近江海八十之湊尓鵠佐波二鳴とあるをのせてやくがに
がへし磯前ハ坂田郡なる磯崎村八十之湊ハ大上郡八坂村なる
處しもといひつるが後畧解をみれば同考にてこれハ八十之湊ハ一所の
名ときこゆと宣長はいへりもさありけれど或人の近江海湖八十あり

かき結ぶはをやサカの約りしたり筆写の誤りなるべしサカの約りはサとなるべし

ばあるを思へばさもあらじと云までに八坂といふ村乃前後に坂とよ
べきところなければ八坂ハ假字にて佐加の約曾なればハ八十之湊といふも
こなたとこそかくいへれ今も八坂といふ村は彦根より一里ばかり西にあ
りて磯崎よりは北一里ばかり北にあたりてうみべに湖濱なれば此
うみべに並びかたよりて湖濱のなみびはたりハ筑摩・磯崎・松原・
長曾根・大藪・八坂とつゞきて磯崎 今ハ磯村といふよあり とえには山ありて磯山
といふこの山の西かたハ水際にて石の多いたるは畫にかきた
らんやうなり此山にまつる神を日本武尊にて磯崎明神と称
す此磯前とあるは磯のさきといふならん此さまをさげじりたる所
また松原といふハ千々の松原ありてそこに田津とよぶは
真鶴にはあらで鵠なるべし云々などと此磯寄より

望湖堂眺望之圖

八坂にむかへにきたるかなひさり今こゝに出きたれ潟は人のよくしれ
る中山道乃摺針嶺なるゝ望湖堂よりみるやうなりわが友の潟
をうちながめてそれを海のさまとさだめてこゝに物生山とあるは佐
和山乃はづれにて彦根は此山乃西にあたりてみえたり八坂はそれ彦根
の西なりおもて湖上の眺望もこれ磯崎のわたりより八坂までと定
よりしてそれ中にも此物生山の流れきたる大洞よりみなと海にいりて
第一とよろしかりさてしもあれどわが郷里のしるしにかくなん

あふみぶり

古今和歌集大歌所御歌とあるに此あふみにあふみぶりとて出る
こゝらの歌をあげゝれバこの宇根の辺にもありけるあはれ此歌ぞとおもへる
よしとのちのまでもこの初の文字あふみとあるをもて他國

のことをこゝにひのくにとみえたるに國名あらじされバおほくは
おほくの假字のたがへるにおもへばかのわが友人小林義兄はいへり伊
香郡に大箕（今の番にいふ大見といへり）といへる所ありこれも畝野といへるもそれはしき
なり大箕より畝野までの間わづかに三里ばかりなれば大箕はいにしへ
乃驛なるべし（和名抄にもみえて）されバ誠より東へのぼる人のやどりするなるべし
さるまゝ是は一首のさまもうらやましきこころえぬ

綱浦

萬葉集一巻幸讃岐安益郡之時軍王見山作歌とある長歌
に綱能浦之海處女等之燒塩乃云々といへる綱は綱のあやま
りなるべく津野乃浦なりんと眞淵はいへり千蔭が略解にも神祇
式讃岐國綱丁和名抄同國鵜足郡に津野郷ありそこを浦

なるべし綱をつなぐよしなれば古言なりといへるをさると宣長ハ於綱の
うらなりしハいまでハかのまかしこへおりてもしに津野のうら
なりと明らけしをハ丸亀より高松領に津ひなる海づらと歌
津よりあなるその歌津より右のさ十五六丁あるさハみな塩浜
にてなほまことそれが続しほのといへるなるべくおもひよらるなると
津野乃郷といひたるところと津野山といへるもこよなく安益の
松山とほどちかし此歌津より北の海中にみゆるが狭岑嶋
あるよりおもひいづべくそれとよみとゆまくの定めもいひがたし

曝井　手綱濱

萬葉集巻九那賀郡曝井歌一首とあるに三栗乃中爾向
有曝井之不絶将通彼所爾妻毛我といへるに略解に云へるは

賀ハ清音によむべし那珂とよぶところ此國にはほかに紀伊那
賀ハ和名抄にもよくあらく濁音によむべく武蔵なるのかぶるをも
清音なり小埼沼に海く載られば武蔵乃那珂なるべしといへるを
或人乃さとしぬのおもとく出をとらくはなむしおのまにさるんと
おもひはるにそれほど一とせどもとて水戸にありくをとれ人よあけ
つねひしに常陸の國なるよしいへるけれどまさしくかさらに中山
信名俗称平四郎が説をきけバそれ證明らかなり常陸風土記曰當
其以南泉出坂中水流尤清謂之曝井縁泉所居村落婦女
夏月會集浣布曝乾この水ハ水戸にちかき史館乃總裁藤田氏
もいひおもふるにかくおかるハ那珂郡袴塚村乃うら瀧坂
とよぶは中河内村へのぼる坂なりそのわたりと曝臺といふそれ裾

乃田とさしし田とよへりて今も坂のふもとに清水のわき出るあり
そこ仮名の考に叶もりといへりさてこの
うたの次に手綱濵歌一首遠妻四高尒有勢婆不知十方手
綱乃濵乃尋来名益 とあるとは 畧解にはいづれいまだ考へず
といへりされは常陸の國にて いくにかうも海濵のかしたに
みなる里あり今の人もてづふといふもくわくの名ちなみに誠なる
ところなりちなみに高ふありをはよくへふも信名の考ふハ多珂郡多
珂郷にてこの手綱ハいふかくへの郡家なるべしといへりそれりて
高ふといふもいとよくきこえたり此二首ここにあげびきおほく
常陸あると明らけし小埼沼乃うたハ鴨のうたにて雑歌ままに
の二首ハ相聞のうたなれバかくまじくあり地名ハ其國の物ある人

にあひてきくべきことぞかし

行方郡

常陸國行方郡をなめかたごほりと訓るハいかなるよしかと郡家
小宮山氏のとひけれバこたへしハこハ七陽乃韻なる行ハ行列
とつぎ雁行魚行など詩にもはくもちふ文字しく使ふなり
それら歌に駒なべてとうちもおほと萬葉集にも馬並而とかけれ
ば行方とあるへ行をならべてふとよめバなべくと書べしそとてよく
用ひるも知てハハヒフヘホ乃ホごもるときハてをムメモとおもしくかよ
ふのよれバあら書るハハヒフヘホの濁音をもかよハし訓る也ハマミム
メモ乃清音をもかよハしかよかしてかふなしく書法讀法といへるもとの
ならハされぞ煙（けむり）とよむも女郎花をみなへしとよむ

よみなそしとぞきこえ今乃人ハしるしつ徒らやかくそ乃けぢめもしれ
わきまへぬハ此名みだりにあやまりとこそ見ゆれありしなどかきとゞむべし
といふさらばこれへと工乃音乃ちかくきこえけるハいとをかし凡行方を
なめかしとぞ見ゆるをもとなるべしかくさるたぐひ多くなきにしも
あらずたゞなるべし滑方ならんにハ行方とハかくまじ行方とかける
ゆゑよし徒のもしるよしもしらずこの名ばかりしるものゆゑなる
べし人の名に並樹氏に行方ありけるをみなかみとしてなほおもひ
むかし後香澄のかうばらひ行方ふに行方村あり郡の名ハ村名
より出たるをのなり

潮来村

潮来村も同郡にありてここにも淫肆ありて世

又曰以下ニ云ニ謂伊多久之郷余所見本与信名蔵本小異

ちかきるやうに徒らなり潮来乃字をいたくさらにひと里びとかふるへども
板くよれし里人の名ハこと上板久とかきしありてなんもさき古の郷
かきあらため玉へるなりといへる 和名抄に板来とあるハ坂ハ板と同じく乃あやまりにて板来なるべし 常陸風土記
とみえバ従是往南十里板来村近臨海濱安置驛家此謂板
来之驛云々又曰板来旧有山賊堀完造堡棲止浄見原天皇
遣建借間命討之賊悉焼死此時痛殺以所其言今謂伊多
久之郷とありされバ痛苦乃よしあるなと板来とかきし後人なさに
板久とあらためしなるべしさるに潮来やいかなるゆゑ玉へるよし
を小宮山氏にとひしかバこの此國乃官醫板垣法橋宗憺 何某公ノ侍醫 のもとに
いへるが某に社されたる書にしるしたれたるにかの醫
麻疹へまゐりてたるときかしこふにてそのころやよりあるとく潮宮

とかきたりいふなるハ書にも祝部ふとかけれバ常陸の方言に潮とい
ひしをハかくかよハせりしならへしところなれバかの君ハ字乃雅
なることをこのむおもひたるものしけれ後麻しゆにあらと語りて居
られおほくむのこやにあけたる社乃御名とミへバ高倉下なりとこそ
ぬれなり高倉下といふハ神武紀曰彼処有人号曰熊野高倉
下忽夢天照大神謂武甕雷神曰夫豊原中國猶聞喧擾之
響焉宜汝更往而征之武甕雷神對曰雖予不行而下予平
國之劔將自平矣天照大神曰諾時武甕雷神登謂高倉下
曰予劔曰師霊今當置汝庫裏宜取而獻之天孫高倉下曰
唯〻而寤之明旦依夢中教開庫視之果有落劔倒立於庫
底板即取以進云〻とありさればハ板宮とかけるもよろしき

この國の方言に潮といふことをいへバこゝに板宮を潮宮とかくハよろし
かへとされバをこぼ海ハ字ふまらく志れ乃やうなるをかあまた
とみの名とうしなへにいひなりきゝ風土記に安置驛家此謂
板来之驛とあるハこれをいへり陸奥へかよふ海津道を
こゝもときこえしより今ハ行方のさかひこのまへにいへる乃
浪逆海にて近臨海濱とあるにもよくかなひたりてそれより四丁目
といふに神明祠あり神躰ハ驛路の鈴なりとぞ闕田耕筆に
図したるものをおほく宮本箟村俗称鼎吉といへり箟村ハそのとこ
乃名家宮本氏の嫡子なくしくきゝけるところなり祝部の名ハ額
賀長太夫といへるよし
高房神

鹿嶋にまします高房神と申すもとは建葉槌命にして神代
巻ノ一云といへるに故加遣倭文神建葉槌命者則服ふあり
倭織とてしづ衣をおりし神なりされば倭文神とはまうす高房
の御名も是より出たるなるべし 古語拾遺に天富命更求
沃壌分阿波齋部率往東土播殖麻穀好麻所生故謂之総
國穀木所生故謂之結城郡（古語麻謂之総也今為上総下総二国是也）とあるごとく
好麻之所生故謂之總國とかきて房は生麻の義なるべし高
も高皇産靈命高彦根命なとゝいへるかなるべし 和名抄に常陸國
久慈郡に倭文郷ありしにて倭織としづ衣をたすけしとか
今は那珂郡に属して静村といふ静明神の祠ありあふひと
いふはなをふさのれとあとくと略まく布佐といへるなりされど初の

字のみへと略く例ありやとれのま云そは磯城島とかきてしきしまと（磯）
馴松とかきて枝ぶれ松まく逸早振をちはやぶるといへれど猶多し

時平大明神

下野國安蘇郡に古居村といふ所をそれまつる社は藤相公の御
靈とぞその隣村神岡といふに祭られし菅相公なり隣村なから
中あしく此二村男女やうは縁をむすばず凶事ありしも古居村に梅と
うゑず衣類にも梅のもんとは着せずとぞいひつたへしとありさは
佐野の近郷なりときゝしなり

菖蒲の前

右の所後本をけば
ミトは三津と称し
きさキセウとあるも
武田義村のまかれる
名しくの誤なるを

伊豆の國なるミトと云をこゝにはもとくにもとの名をとなへたり其の

ミトのかたはらにキセウといふところあり 二所やそれにいふ書とあり その字ともとゝもしつゝも不乃

我ぬ人まで來るてら菖蒲前の墓ハそこにあって擬玉とい東よありとぞ前川善養氏の話なりそれよりつきそくさそとハ後の巻ふいふ

山上に頼政卿の女君菖蒲の前乃廟ありといへりとききて芦の湯へ越後の僧きたりて云くむかし宇治川乃合戦に宮うちまけ玉ひぬれバ源三位の卿仲綱をはじめとして息子達おのおの連あやめの前をも打具して紀州より船にのりて伊豆国へ落られきたまふに伊豆にてあやめの前なくなりたまひしかバ同國にあをきゆるとさえ霊廟をバたてられたまひきと家系にあるなり其後裔越後國にかくれ居て後にハ農業をなしぬるに鎌信乃ころはひへとらえれて出るなり川中嶋乃合戦にいさとみ戦功おしけるにおちまでひきこもりて農業をはじめぬ余ハ彼乃系につらなりて今僧といふまり此所より伊豆乃廟所がくれとたえバいつもくて拜をしたまをまうでなしてそれをといひてものを夢にみしぬとはゑとうへんやうにあらざるさ其後つきてこの僧にかくわかれふハあらねど伊豆人に會せらるごとにわすれぬ出れバまづ僧とひはまでたまりたるへんはあらうきて訊くとき三嶋乃在れる醫師に會すにもあまたく此ことをかたり出しに醫師云實に其ことなり伊豆ふまかるハ明神にまうづるすべて此ならみわするみふべきなるといへりと石原理兵衛まうしきと佐々木壽六

京師人 箱根乃芦湯へまゐりしとき乃話ふあらしたり

比禮振山の化石 天草人

松浦佐用姫は大伴連狭手彦乃室なて狭手彦奉勅命御軍を率て西蕃におもむく時佐用姫のきく別をかなしみて高山にのぼり領巾をふりて行船をまねきしがそこにて立ながら石となりたるとぞいひつたへぬ萬葉集五山上憶良のうたに得保津必等麻通

良佐用比米都麻胡非介比例布利之用利於返流夜麻能
奈とあるを今ハ其山と比禮振山とよべるさるは亀井道載
が話に佐用姫がいひしとあるも誠なるべし今は彼山なりけりまれく
さるに姿のいつとはり出たれりその物はまろ緑しきとえて殿に
まゐりきし行かなしたしさまにつきそれとみに西国は今とこの女
は面くらかなく別をしむは事ごとにまへがたき事なり橘梅仙
が西遊記にいへらくながらは肥後国天草の人は其情なさくの
わりもとほかく濱邊にいづるもばしけるかぎりをきこは女を老はわ
かきは行くつふさしく砂どもにうち伏してとそれがさくをさ
まさばこれさこはいとはるしくなりくそこくなまへくはあらざるなね
聞とふにらりをとえつぐとひきくれしく伊勢ふれりてき出まで

それ伊勢乃こやふかぎりは一人もちりぢりくまたぬにふきとのか
がりそるとのねぎらくえらきりに舟とも伊勢く伊勢さらうたへしとて
笠ふどくつまぐくとも伊勢く大和物語に車をぬねのまくとみくえ
いふど舟ふのりたる人は車ともぶとくかとくたとさし出くこれ弥を
をほくみなまたにかれはいとらひさくなるふまくみかとをそれがいとふ
しかりまさりとまけふさきにかをひあくされくかふしろりきこれかと
佐用姫がひもとありしなどられるべし

小篠鈙が八頭蛇乃話

古事記是高志之八俣遠呂智毎年来喫云く身一有八頭八
尾云く神代巻毎年為八岐大蛇所呑云くをあるにや偉さはやつ
まとはく遠呂智乃遠ハ尾なり呂ハ助辞にて山鳥乃をろの初尾

などいへるをおもふに萬葉集にはいかゞあらんおぼつかなしされどあやしきを
智は巖乃ことにて千早振などいふ智とおなじくかしこみていへる
詞なり蛇八尾ふらぐおとびきゝをのふれば遠呂智とはいふなるべし
さてこの八岐大蛇を漢學者など八頭乃蛇あることをきこえし山賊の
名なりといへるもひがごとなり小篠敏 濱田侯文學 俗稱大記 とかくいひしが彼國にて
殿乃えつるとかきこの安藝國乃境に八面山といふありその山もとの
畑ありしに田面八丁ばかりもひろかる草刈の鎌をいれざるところあり
こゝに八頭乃蛇ありてまれにみる人ありされど全身をみるものは絶
えてなし其蛇乃いかれる時は眼ひかりてもゆるばかりの氣をはくなどいへり
さきほど吾殿あまこの人をやりてこの蛇をとり出し其全身をうつ
して公にも奉らせこはそのうつしなりとてみせまゐらせくれたまへる

畫なりきこのほど真風といへるもの書るおなじ草子にもこのことを出
せりそれには石州邑知郡出羽組百姓勘三郎といふものこの八頭の蛇
にあひしといふかしらは其畑を八面といふ八頭のかれし一尺餘つゝは
かり五六寸草より出来るをまれに三尺餘となしおもしろしとかゝれて
ありしとおもふ

逍遥院内府公鶯乃こと

古今集なる百千鳥八諸鳥のことなりといへり契沖真淵の考くはしく辨ぜら
きこえたるを今のひとはしらずされどそれいかにとあらはにあれど
なにげなくあれどかの二条家にて名高き逍遥院内府公乃
うたに百千鳥さへづる春はとあるをこのうたのうへにはうぐひすを
乃御説とありこの内府公八古今傳授乃人なりされどかくとあれどなど

ゐかしらくさのぞ

稲負鳥

同集穐部にわが門ふいなおほせどりの鳴なべにけさふく風に
鴈ハきにけりよあるふるくより種々乃説あれどこれぞといづれとも定めがたき
今し本居宣長ハいなおほせいハ雀のことなるべしといへるハにひなへ乃
うはりそる成べしとくといへれしがいへと定めつるしなれどその名義とよう
まつどほる人の説にハこハ旧説に庭たゝきといへるよしこの鳥に二
品ありくわほさの人のちかきるハ尾を上下にうごかしくとつきとよへ
どうちとりいもそれとり出てハ名あり今ひとつハ尾を左右にうごかすふ
を鶺鴒とうなりそハ人のいふよう入てさ、かぶりとありまて見ゆとう
くそれすてとしてさ陸くうく似されバいれよういうとれほそる名

ありといへるさる鳥乃あるんにハ出れバとらしよ数とりしたこしと伊豫
の國吉田よりハそこ藩にくこれ集らる講説せしとき藩士柴田氏ふ
我人乃さるとりハ此山ふさくまれしみふとありといへれさて此人ハ陸く
ありよひしふおし孫がこゝにとゞ名なきしがそれ程も常陸の鹿嶋ふく
ころぎられさきく社家下生清海がいへるはなふしこハかしこの濱邊
ふくいるまきふつ入我ととも土俗これをビンズイかといふ八月末にわたりて
冬ぬくらあるとよるにておほく屋代弘賢ぬし所蔵の観文禽
譜よういれに鶺鴒に數品なふれる石見鶺鴒といふハ尾を左右ふ
うごかさとありくじ色て石見国より出されバしか名はるとしが
されらうきやさちさふがらいれこ鶺鴒とうよそのにおもし　されバ
主綱はらく我ともにいさゝいいふみのおやかりふハあらざれらまし

いとゝ勢ひをましい寫真

いへることゝへふがをとふくいふと堂ゑへるハ好士乃志ハざるや此ハ
かくふれかゞらしく顕註密勘にも鵜鶘と称して無差證を
あきバ今ことに鶴と称へてもしかの伊豫ふれと鷹鳩なとハ同種
う其羽色るずらり人傳ふきてざこのわけとあふあらく成とむ也
ゝ鵜鶘のかさふりと称して少しからずとふ人びのこ絵不ありむし
くうきされと定まらぬ鳥の名とも今なほかうちふくれおりとぞあ
りふいありず

咲眉春ハ彦火々出見尊の考

世に七福神とてなかぞきまりふなりて咲眉主といへる像とされ
皇御國の神とはもられぬさきでいかるやるいるふおもしの
御名としおく人ふく蛭子と称しつる絵えぞく蛭子とかさ額ふは

蛭子宮なかるハ夷祠戎社ふる所さしもり夷戎のもじいえどもとの
假字にてく蝦夷と日本書紀ふ愛瀰詩とかけるふことくなるべし
蝦夷ハ中国ふりいやしめる術ゆく夔摭の義れらんか
ますゑふ御子みく古事記にハ久美度迩興而生子水蛭子此
子者入葦船而流去 舊事記同 書紀ふハ次生蛭子雖已三歳脚
猶不立故載之天磐櫲樟船而順風放棄ゆきあまたく不祥御子
ふれバそふかし其由ひしとあるを然るを世乃人いまく福の神と
あふぎまつふことふおもんまくに蛭子ハ比留古ともくまく恵備須ゆ名
くむしよれしまて摂津國西宮と恵備須の本宮と称ふるをひとふ
西宮蛭子まつるハ西宮夷三郎れとのへりもいつれかうしろもくまぐの
説あまでもとへべくもうけかひかたし　西宮ハ兎原郡にあるぢ延喜式

神功皇后紀云、于時皇后之船廻於海中、以不能進、更還務古水門而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不可近皇后、當居御心廣田国、即以山背根子之女葉山媛令祭とあり

さみなる大國主乃西の神社ふハあらざなりすべて西宮大神宮と稱まうくとれのへハこれを廣田宮ふかく天照大御神ふハましまさずやむりしかの小篠飯出上とめてこひしはいぐ此とふれまびしこハかまづ此へふちねるとこれハ彼社司某にあひく家記ととしふさかりさねど今ふふべく蛭子ノ宮と申うしねもそれハあふたるかざしこといひしころ寒川辰清膳所侯臣近江国志作者が説ふ或説ふハ椎根津彦命と祭まれなりされどこハ神秘なりといひれよね羅山子神社考ふも廣田とあつもいづまふもくくル蛭子ふハあらん或が云西宮に沖の蛭子といふ祠ありそれが夷三郎ろくもと世にいふの漁者なりしが鯉とはるると能しつもやとこにはつまるなりといへも石津の蛭子と稱まうろありそハ和泉国大鳥郡なる石津乃社なり祭まれ神ハ八重事代主命なりとろうきや延喜式かね石津太

社神社なるべきよしれ恵備須と云ハ八重事代主命をいふといへるを八神代巻に以釣魚為樂ゆゑあるとて定めなるべしされど事代主命ふも鯛のはなよしいわれしまた何故恵備須と名云うる人もろく人の志らぬところなりしを額にはしをこるれどむかし筑前侯の文學亀井道載がかくある詩のかの換嶽二十四境の一ツふ蛭子祠といへるをつくるなふ伉儷となりびましとよしのこともあるを何やしさふぼひやるしらハいふへふワの邦なるふ蛭子ハいとおぼくるすびまそといひかなそうりこそろむつまくうるおのまごひいよさらしことくかりかべしと淋人のよしといへれバここふあるとなり世の人のいつき傳まる咲眉主とまうしそ彦火々出見命なるふべしそハ神代巻ふ兄火闌降尊自有海幸弟彦火々出見尊自有山幸始兄弟相謂曰試欲易幸

遂相易之各不得其利云々兄怨之曰非我故鉤雖多不取益復急責故彦火々出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢塩土老翁云々海神乃集大小之魚逼問之僉曰不識唯赤女比有口疾而不来固召之探其口者果得失鉤已而彦火々出見尊因娶海神女豊玉姫仍留住海宮已経三年云々彦火火出見尊已還宮一遵海神之教時兄火闌降命既被危困乃自伏罪曰従今以後吾将汝俳優之民請施恩活於是随其所乞遂赦之云々とあるその事をくはしくいひ俳優と並坐せあれハ豊玉姫なるべしこれよりおもへバかの御名の咲眉主ハ為笑の義なるべし眉よりさく義なりしハ読法にて恵美須咲満春のまさしきものゆゑの為笑ハうしなひたまひし鉤を得たまひ此大御國を

さてかくしてふたゝびなりてぞ彦火々出見尊とまうし御名ハ鹿葦津姫命の誓するによりて同巻に如實天孫之胤火不能害即火燒室始起煙末出之兒号火闌降命次避熱而居生出之兒号彦火々出見尊云々やがてこの御名ハ字のごとく火々の義なれバと含笑をかしくおもひよりて義とおもひて恵備春とハいひしにあらんかさかの鯛をはりたまへるうちより福の神とまうすものとなりしより鉤を海幸獵と山幸と書紀などにいひたまひて大御国をえたまひしハ大なる福なれバ福の神とあふぎたてまつるにおよびて並坐といへるも海宮に入りたまひ豊玉姫にあひしたまふこともせねぶしはるよしなれバ咲眉主ハ彦火々出見尊なることあきらけし

端出之縄

細云しめとこハか きらの三言の約まれ ば、然らど後とゆる とうゑ、かなくせしと いふべき例なり 又曰垣根ハかきらねを あると約むく云し とゑり根ハ目の意共 あると家根、桁根、木 根などの根なり垣ハ 限の意なるべしその 加利の約伎なると 久く轉じ用ふるの れり東国にて八垣 を久禰といへり

和名抄端出之縄與注連同續日本紀には左縄端出とあるを
しりくべなはと訓せり上田秋成浪華人云志利久米の志〻
利ハ後なり久米ハ限目なり加伎乃約りて伎となると久ハかくいふ
垣根ハかぎりねなりと久ハ約めて利を省く久米といへるを免
そこのいはちかふ云詞なりそのもとハ神代巻手力雄命日神を
岩門より引出しまゐらせて入りてはつじと御後に引
わたしたるかぎりの縄なりしかれバ縄といふハそのつゞきを又
畧たる詞なりそれをとふくるのも自ずからしかせなりといへ
へりと宣長もしつ藁の本をひくのハこれみてわざのあることを
まずてどとるふがくことなれバ縄なりといへるもいづれも是なり秋成
がいひし注連縄ハそのつゞきを畧きたる詞ふくまものとふべからるしを

さてとよへるをいやなとしろしそハ牆をうつと標結といへるされバ萬
葉集巻二近江天皇崩御之時婦人歌にかくあらむと豫ねて
知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを又石川夫人の
詞にささなみの大山守ハ誰がためか山に標結ふ君もあらなくに
とありてしほけ標野なども心にしむるもの心に領じるふく
わすし意の詞にて高田与清の説にしくべを越陽にてコユルヘダテといふ義
にや垣をクネといふもさらしなる萬葉集巻十四に久敝故之尓麦喰
駒のはつはつシリクメチハも後越陽縄にて後へ越ふ陽の縄と云意なるべし
といへるされども陽といへる義ハうけがたしかきり陽の意とよむべきをや

河蝦ハ河鹿の化したるなるべし

さてとよひかくつといへるもハ田池などに鳴くものとハことなるべしまた

世乃書どもに萬葉集のうたをおほくさとしけるつまにあれ
かはづとよびたれどわかきころ人この河蝦を河鹿なりとおもへて
河鹿といふは魚の類にて鳴ものにあらじと伊豫松山藩士竹村某
はじごろ川漁とて乃ちはつとそのいとまにハ山川に釣しくよく
しけるが人の河鹿といふは魚乃おほくなるかちなるがいけのと化
して蝦となれバうおくしき聲をあらしけるわとこのうちまささ
これみな白く後のまどひハとけらるワず湖西朽木家の士の話
にも河蝦のうまるる子ハ魚の躰なりとあるにバくじそハ魚の躰にて
後蝦と化もらうと咄しけし武蔵国玉川のほとり大蔵村にまし
あまくもまるなどあるじ乃翁寶筌齋（石居市郎右衛門父名春翁）のうき
まうにこの川にも河鹿ハなきるとつひに鳴しをきくさらたることなし

河づれどもなくハなく魚ともいへれしうべ此蝦ハ山河の清らかなると
ころにすむハ鳴ぬものなり萬葉集乃うたに三吉野乃石本不
避鳴川津諸文鳴来河乎浄とあるにてしるべしかのもとろぐ
みさしたるこれらのことれどしこのころの古今六帖などにもむし
の声にハなくく水の声からのつきにみえ新古今集雑の部に藤原
忠良が詞にそろうにあへバこれもさしがにあはれなり小田のかはづ
の夕ぐれの声とよめるにて小田なるものと河なるものとのまぎれ
まじしられぬ我友本間遊清のいへるハ河鹿ハ河蝦の俗称にて俳諧
者流のいひそめしことにてあれさるハいつにへにて称すべき魚の
化となるとあるハその魚をとりたら河蝦のうまるる子にて成立とされど
親の如くならばまさ山川なると田沼なると異類にがあらじ

山川なるハもとより水のきよくてバかりならずや音さへ辞も清らなり
田沼なるハおのづから水ふ濁りてバおのづから聲もにごれりといへる
いとおもしろし

游曾　阿太

本間遊清云萬葉に見えてはてのことはおそとあくるみのとくいふもあれそまつわりけり

萬葉集巻九詠水江浦嶋子短歌ふ常世邊可住物乎劔刀己之心柄於曾也是君また一の游曾能風流士といへるも於そふ遅鈍のこゝろなるよし畧解ふいはれたりしべ敏としるべいへきをしかるべし備中国高松あたりにてハつねに愚人のことを游曾といへることもありまた阿太といふも真渕の考に今乃世化野とかきしおぼしきものハ他の字乃ふの脱たるなるべし化とおぼしきもしいかし他国とおなじ国他人とおもふべしとい

他のこゝろをおぼゆる人のこゝろかへるとおもふなるわがこゝろに他ころつ意なる人に施されバよろこふうつゆくのしるしといふ成べしといへるハさもありぬべきことなれどハおほやけ乃中畧なるべし備中備後因幡伯耆あたりにてハ今もすでに辞あり家の外とさしてあなたふかしくいふ人ハなくハあなたかすかにいへるはかれバ彼方なるこしかることあるにしかあるやうにおぼゆる都の田舎ふのこれるも

頭

人乃手にあるをつぶりといへるハまたさうたがひなきものなるべし古事記ニハ都夫良意冨美とあるを書紀にハ圓大臣とかゝれまた萬葉にハ圓江とかきつぶらえとよませたる人のあるハめでたきことなるとぼゆるとおもふはよくまなぶにおほくよまるべし鳩どりなどかい

つぶりとハよく水に潜（カヅク）きてもぐりをるゆゑなるべし鳰どりのかいつぶり
早稲（ワセ）なども冠辞（クワンジ）にいへる意（コヽロ）なるべし高田与清（タカダノトモキヨ）が説ニ壷（コ）をつぶといふも
圓（ツブラ）乃義（ヨシ）なるべしと倭訓栞（ワクンカン）にもいへり按に花のつぼみ、局（ツボネ）、引（ヒキ）つぼね、
つぼ皿（ザラ）、はか口（クチ）つぼく礫（ツブテ）甲螺（ツビ）子・粒（ツブ）など同意なるべし都乃まゐ水
はぶくぬけくろみて僮僕を和名抄にツブ子と訓（ヨミ）後撰（ゴセン）集（シフ）にもあ
まろまろこハ圓部（ツブラベ）の義（ヨシ）にて頭（カシラ）を烏帽（エボシ）子もかぶねとのふれ
ざいやしきくいへるにやネとべハ横（ヨコ）にかよふ音なりて東国（トウゴク）の方（ハウ）
言（ゲン）に酒（サケ）にツブロク酔（エウ）て又ハ栗（クリ）の實（ミ）乃いがより落（オチ）たるをツブ栗（グリ）
などいへることあるハこれ丸（マロ）きなりといへるとぞ

麻呂（マロ）

人の名（ナ）にある何丸はまろとつけあるくのこれを丸とも書とやいへる

これれ鄙（ヒ）下（ゲ）の稱なるべしそハ拙あるとかいひあるといへれハかしこか
よしありてよ後ハさらにて我身をさしてふりて難（ナ）波（ニハ）わたりの人
つらのしげきさまをわさひのたくいとも稱ひさまを海
つきよへなほ我おじてもありて今乃人身のふゞとくそしどぞ
ゆゑに麻呂といひたりといふ

旧蹟紀聞上終

松葉軒